

第24回講道館日本語教育ボランティア実施報告 ～世界の柔道コーチの皆さんとの双方向的な言語文化教育活動～

齋藤孝滋 イ・スヒョン 稲垣麻優香

I. 概要

1. 講道館日本語教育ボランティアとは

齋藤 孝滋

柔道は、スポーツ全種目においてはサッカーに次ぐ世界第2位、格闘技系競技においては第1位の競技人口を誇る日本発祥の世界文化です。本企画は、世界各国から柔道の総本山講道館に指導者研修のために訪れた柔道コーチの皆さんにご協力いただき、一日都内観光の場をお借りし実施する日本語教育活動です。

日本語教育活動といっても、実際は、フェリス生が各国柔道コーチの皆さんに日本語を教えるのみにとどまらず、反対にフェリス生が柔道コーチの皆さんから母語や様々な文化を教わる形式で行うものです。いわば、世界の柔道コーチの皆さんとの双方向的な言語文化教育活動なのです。

また、本企画は、2003年開始以来、既に40ヶ国以上の柔道コーチにご参加いただき、フェリス生の参加学生も全学部全学科に及びます。

24回目を迎える今回は、2019年3月23日（土）に実施され、講道館国際部仮屋力先生のご引率のもと、講道館に指導者研修のため来訪中の柔道家：オランダのElisabeth WILLEBOORDSE(北京オリンピック銅メダリスト)先生をはじめとする香港、リビア、ガボン、アゼルバイジャン、キルギスのナショナルチーム柔道コーチ6名の方々に、フェリスからは、文学部コミュニケーション学科2年生2名（イ・スヒョン、稲垣麻優香）引率教員1名（文学部教授 齋藤孝滋）が日本語指導を行いながら、それぞれの母語での表現を教えて頂くという、双方向的な言語・文化の学びあいの活動を行いました。ルートは、講道館→永昌寺→浅草→増上寺→東京タワーです。

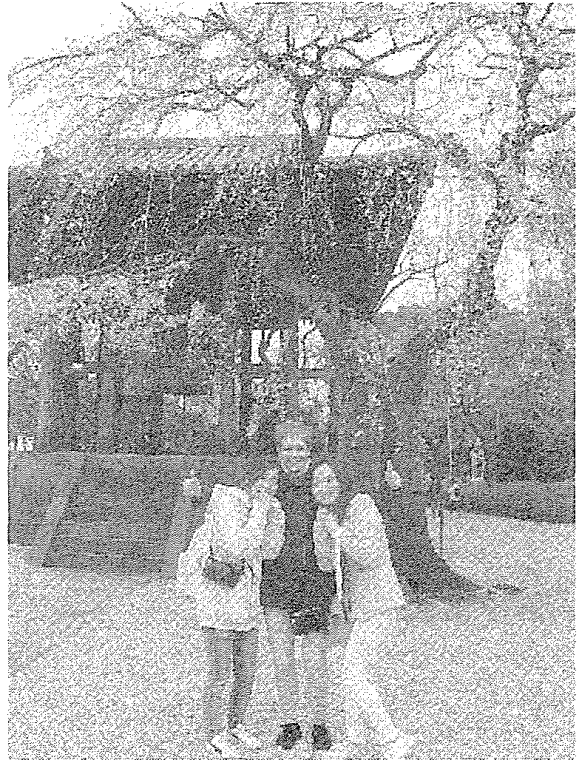


講道館創始者嘉納治五郎師範（NHK大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」では、役所広司さんが演じています）像前で、記念撮影。

左から1人目：講道館国際部仮屋先生、
右から1人目：講道館アシスタント藤中先生



講道館発祥の永昌寺で、和尚様に柔道発祥のレクチャーを頂きました。和尚様のお兄様はフェリス女学院大学で講義を担当していらっしゃったそうです。



とても日本語の勉強に熱心な Elisabeth 先生と
桜の下で（於増上寺）

2. 双方向的な言語文化教育活動

活動は、行く先々で、柔道コーチの皆さんにポラロイドカメラで興味あるものを撮影していただき、その写真の説明を、ポラロイド写真の余白に、フェリス生が日本語（ローマ字と平仮名）で、コーチの皆さんがそれぞれの母語（の文字）で記し、相互にその表現を学びあうというものです。

昼食も重要な双方向的文化教育活動の場です。今回は、ムスリムの方の礼拝室があるラーメン店で食事をとりましたが、ムスリムの柔道コーチの方々は、食事の食材について確認され、また、実際に昼食後、礼拝室で礼拝をしていらっしゃいました。私たちは、相互の宗教文化・食文化についてについて、楽しく学びあうことができました。

3. 対照言語教育教材の作成

最終見学場所の東京タワーでは自由時間の合間に対照言語教育教材を作成します。ポラロイドカメラの余白に記した日本語と柔道コーチの母語の表現を、前者はフェリス生が発音し、後者は柔道コーチご本人に発音して頂く様子を収録し、ネイティブによる対照言語教育教材（画像音声教材）を作成するのです。

今回は、柔道コーチの第一言語（母語）日本語の貴重かつ生き生きとした対照言語教育教材を作成することができました。

4. 今後へ向けて

毎回貴重な機会を賜っている講道館館長先生、講道館国際部の先生方、ご協力くださった柔道コーチの皆さんに、感謝申し上げます。

参加学生には、講道館日本語教育ボランティアの双方向的な言語文化教育活動で得られたノウハウや問題意識をさら



ポラロイドカメラを用いた、双方向的
言語教育教材づくり（於東京タワー）



NIKKI 先生（香港）の撮影ポラロイド写真を用いた、
広東語（上段）—日本語（下段）の双方向的教材。
併せて、NIKKI 先生とフェリス学生のネイティブ
音声を収録しました。

に高め、社会貢献へとつなげていくことが期待されます。

また、作成した対照言語教育教材も、様々な導入教育活動で使用させて頂く予定です。（なお、ポラロイド写真本体は、撮影された柔道コーチの皆さんに記念としてお渡ししております）。

今後とも、講道館の先生方、世界の柔道コーチの皆様のご協力をいただきながら、楽しく充実した双方向的な言語文化教育体験の場として実施できれば、幸甚に存じます。

II. 参加学生報告

講道館ボランティア参加報告 1

イ・スヒョン

今回、はじめて講道館日本語教育ボランティアに参加しました。

最初に講道館に入ったときは選手の方々の身体が大きくて、怖かったです。

出発する前に自己紹介をしましたが、永昌寺に向かう電車で一人一人に改めて挨拶をしました。事前に調べた各国の言葉で挨拶と自己紹介しました。発音もおかしい片言でしたが、皆優しく私に耳を傾けて、挨拶してくれました。

トニー先生はガボンから来ましたが、私はガボンという国を今回初めて知りました。ガボンはフランスの植民地だった歴史があって、今でもガボンではフランス語が公用語として使われていました。国のことだけではなく、少しですがその国の歴史まで分るようになりました。

私は話しているうちに皆の耳の形が少しずつ変わっていることに気づきました。柔道をする中で圧迫されると耳が潰れるとのことでした。

永昌寺で写真を撮るとき、ラファイルさんとジャラルさんは映らずに外に出ていきました。イスラム教では神の姿を

表現することが禁じられていて、写真も撮ってはいけなと知りました。

香港からきたニッキさんは日本語がすごく上手で一番話ができました。ニッキさんはすごく面白く、優しくて自分で買ったお菓子を分けてくれました。

お昼にはハラルラーメンを食べました。そこには、お祈りの部屋があってイスラム教の人々がお祈りできるようになっていました。

浅草と増上寺ではチェキ（ポラロイドカメラ）をもって皆に写真を撮ってもらいました。私たちは写真に簡単な文章を書きました。日本語をアルファベット表記で書いて皆に読んでもらったり、逆にその国の言葉で書いてもらって教えてもらったり、相互交換をしました。しかし、そのやり取りも簡単な英語では全部伝わらず、難しかったです。

写真を全部渡してから、ティムール先生が稲垣さんに「キスをしてもいいですか」と聞いてきた時は驚きました。それはありがたいという表現であることが分かりました。

日本と韓国の文化は少し似ているので、普段は文化の違いをあまり感じないですが、今回は様々な文化に触れて初めて知ることが多かったです。

講道館ボランティア参加報告 2

稲垣 麻優香

各国の柔道の先生方との交流は、多文化のコミュニケーションについて考えさせられる良い機会となりました。

先生方とは、永昌寺、増上寺、東京タワーといろいろな場所を回りましたが、ただ記念撮影がしたくて「一緒に写真を撮りましょう」と言ったら、少し困った顔をされたのです。「あまり私と仲良くしたくないのかな」そんな風に思ってしまったのですが、話を聞くと、ムスリムの方は他の宗教に関する場所で写真を撮ることは好ましくないのだと知りました。ムスリムの友人もいるので、ある程度イスラム教への理解はあるつもりでいましたが、国によっても、人によっても、宗教に対する考え方が違いますし、「イスラム教徒」と一括りにして理解することはできないと感じました。

一番驚いたのは「キスしていいですか?」と言われたときです。一日行動を共にした、感謝のキスをしたいという意味だったのですが、日本で生まれ育ち、キスの文化がない私は「え！いきなり愛の告白!？」とびっくりしてしまいました。この勘違いは少し恥ずかしかったです。驚いて一度は断ってしまったことも、失礼な態度だったかもしれない気がかりであり、それぞれの文化を伝え合い、理解し合わなければ、お互いの行動を誤解してしまうこともあると以上のことで強く実感しました。

言語については、多国籍の人々が集まるグローバルな場では、英語でのコミュニケーションが欠かせなく、高度な英語を身につけなくてはならないと改めて思い知らされる場面が多かったですが、先生方の母語で挨拶ができるようあらかじめ準備をしていったら、動画を撮って喜んでくださる先生もいて、それぞれの言葉を尊重することも大切だと思うところもありました。

たった一日の短い時間でしたが、今後も自分が学ぶべきことを見直す、とても貴重な体験となりました。みなさまとの出会いに感謝します。ありがとうございました。

本報告は、フェリス女学院大学 HP「FERRIS BLOG (フェリスブログ)」に掲載された同名の報告「第 24 回講道館日本語教育ボランティア報告」(URL:<https://www.ferris.ac.jp/blog/2019010/5618>)をもととし、参加学生の報告を加えたものです。

謝辞：講道館館長上村春樹先生、国際部の先生方、ご引率賜った講道館国際部仮屋力先生、アシスタントの藤中拓馬先生、そして御協力下さった各国柔道コーチの先生方に深く感謝申し上げます。